

「自由」としての「野生」

——H.D.ソローの「ウォーキング」——

田中 聡子

はじめに

ヘンリー・デイヴィッド・ソー (Henry David ソー, 1817-1862) は、現代では「アメリカ環境保護の父」として崇められている。19 世紀中葉までのアメリカの自然観をまとめ、アメリカにおける本格的な自然保護活動の根本となる思想を築いたのがソーであるとされているからだ。¹ 2005 年 2 月に池袋で開かれた「エコのもりシンポジウム」では「持続可能な社会は『森の生活』から」と題し、ソーの代表作『ウォールデン』(Walden, 1854) に見られるエコロジカルな文章を提示し、大々的にソーを紹介した。²

とりわけ環境保護活動家に人気があるのは、本論で取り上げるエッセイ「ウォーキング」(“Walking”, 1862) である。それもひとえに、この作品中の「野生の中に世界は保たれる」“in Wildness is the preservation of the World”(224) という一節が、様々な環境関連イベントや書籍にとって恰好のキャッチコピーだからだ。環境保護活動に功績のあった多くの人がこの一節を引用している。『砂土原の歳時記』³(A Sand Country Almanac, 1949) を書いたアルド・レオポルド (Aldo Leopold, 1887-1948) は、この言葉を彼のノートに書き写している。彼は、「土地の倫理」と呼ばれる原生自然保護の思想を打ち出したことで有名な、アメリカの森林管理官だった。このことは、この一節が環境保護思想に結びついたイメージを持っていることを示唆する。⁴ さらに、アメリカ国立公園設立運動で有名なジョン・ミューア (John Muir, 1838-1914) が設立した環境保護団体シエラ・クラブ (Sierra Club) は、近年までこの言葉をスローガンとして使用していた。そのため、この言葉の環境保護的イメージはさらに強く、そしてさらに広く人々に浸透することとなった。⁵

環境保護の文脈で使われる場合、この前出の一節にある「野生」“wildness”は物質的な原生自然のことである。しかし、環境保護の文脈を離れて考えた場合、必ずしも原生自然という意味とは限らない。この“wildness”の意味することについて異なる意見を持つ人もいる。ローラ・ウォルズ (Laura Walls) はソーが生きた時代である 19 世紀の自然科学の観点からソーを研究している。彼女は、このように指摘する。「もし本当に森林を守りたいなら、プリミティヴな性質という抽象的な野生“wildness”ではなく、原生自然のある土地という具体的な野生“wilderness”を使うべきだ。」⁶

そこで、本論では「ウォーキング」における“wildness”には、どのような意味が込められているのかを考察していきたい。

1. 「ウォーキング」における“wildness” — 『ウォールデン』との共通点と相違点

原生自然としての“wildness”はソーの作品の多くに見られる。もちろん「ウォーキング」と『ウォールデン』にも表れている。しかし、ソーが“wildness”という言葉を使うとき、その意味は同じときもあり、異なるときもある。決して一様ではないのだ。そこで

筆者は、両作品における“wildness”の共通点と相違点を挙げてみたい。

まずは共通点を見てみる。「ウォーキング」と『ウォールデン』における“wildness”との共通点は、一つに人間をわくわくさせる未知なるものであるということ、そしてもう一つに、人間に活力を与えてくれる「強壮剤」「*tonic*」である、と定義されているところである。

まずは、『ウォールデン』を見てみよう。ソローにとって“wildness”とは、人間にとって計り知ることのできないことであり、人間はその「野生」を知りたいと思って欲するものである。下は『ウォールデン』の「春」(“Spring”)の章からの引用である。

At the same time that we are earnest to explore and learn all things, we require that all things be mysterious and unexplorable, that land and sea be infinitely wild, unsurveyed and unfathomed by us because unfathomable. We can never have enough of Nature (*Walden*, 317-8).

この引用に使われている接頭語に注目してみる。ここでの“wildness”は「無限に野生的」「*infinitely wild*」である。それは「探求できない」「*unexplorable*」や「測量することができない」「*unsurveyed*」などのように否定の接頭語を多用している。否定の接頭語は、“*explorable*”や“*surveyed*”などの言葉が持つ、「人間が知り得ることができる」ということを否定する。つまり、未知なる自然を表現しているのだ。ソローは「野生」の底知れぬ奥深さを、高揚する気持ちを抱きつつ堪能した。ソローにとって「野生」が魅力的なのなのは「測ることができない」「*unfathomable*」だからだ。ソローが生きていた当時、まだフロンティアは存在していたが、手つかずの自然は激減していった。そのように人間がますます文明を広げていき、アメリカ大陸において未知の部分が失われていった時代に、ソローは人間が解明できない未知なる「野生」を肯定的に捉えたのだ。

このようなソローの未知なるものへの肯定は「ウォーキング」にも見られる。

There are other letters for the child to learn than those which Cadmus invented. The Spaniards have a good term to express this wild and dusky knowledge, Gramatica parda, tawny grammar, a kind of mother wit derived from that same leopard to which I have referred. . . . What we call knowledge is often our positive ignorance; ignorance our negative knowledge (239).

ソローは、カドマスが発明した文字以外に、子どもたちが学ばなければならない文字があるといい、スペイン人が「黄褐色の文法」と表現した、「こうした野生の、あいまいな知識」「*this wild and dusky knowledge*」を賞賛する。ここでは、知識という抽象的なものが「野

生的」であるとされ、しかもその知識は「肯定的な無知」“positive ignorance”とある。人間にとって分からないものの存在を分からないものとして、謙虚に認めようとする態度が表されている。ソローにとって“wildness”とは、対象が自然であろうと知識であろうと「未知のもの」であるということが読み取れるのだ。

“Wildness”のもう一つの共通点は、人間を活気づけてくれる「トニック」と定義されているところである。再び『ウォールデン』の「春」の章からの引用である。

Our village life would stagnate if it were not for the unexplored forests and meadows which surround it. We need the tonic of wildness - to wade sometimes in marshes where the bittern and the meadow-hen lurk, and hear the booming of the snipe; to smell the whispering sedge where only some wilder and more solitary fowl builds her nest, and the mink crawls with its belly close to the ground (*Walden*, 317).

「私たちには、野生の強壮剤が必要だ。」“We need the tonic of wildness”とある。ソローは「野生」によって活力を得ることが必要だという。一方「ウォーキング」ではどうかというと、「森や野生から人間を元気づける強壮剤や木の皮がとれる」“From the forest and wildness come the tonics and barks which brace mankind” (225)とある。ソローは「ウォーキング」においても、『ウォールデン』同様に“wildness”は“tonic”であるとしている。“Tonic”としての“wildness”は、人間にとってなくてはならず、活力を与えてくれるものののだ。

では逆に、『ウォールデン』と「ウォーキング」の両作品における“wildness”の一番の違いは何か。それは、“wildness”という言葉に“freedom”の意味を含めているか否かということだ。ソローは“freedom”という言葉が『ウォールデン』と「ウォーキング」で6回ずつ使用している。しかし、『ウォールデン』は331ページ、「ウォーキング」は44ページであり、作品の総ページ数で比較すると“freedom”の密度は一目瞭然である。ソローは「ウォーキング」の作品で“freedom”をより強調したと言える。

『ウォールデン』での“freedom”は次の文に見られる。“As I preferred some things to others, and especially valued my freedom, as I could fare hard and yet succeed well, I did not wish to spend my time in earning rich carpets or other fine furniture, or delicate cookery, or a house in the Grecian or the Gothic style just yet” (*Walden*, 70). ここにあるように、「自由」とは、生きていく上で必要最低限なものを持ち、身軽になり、物を買うための労働時間などはなくすこと、という意味で使われている。また、多くの場合、鳥や小動物が「自由」に動き回る様子を表現する際に見られる。

では「ウォーキング」においてソローは“freedom”をどのように扱っているのだろうか。

1) から 3) はこの作品からの引用である。

- 1) I WISH to speak a word for Nature, for absolute freedom and wildness... (205).
- 2) It is hard for me to believe that I shall find fair landscapes, or sufficient wildness and freedom behind the eastern horizon (217).
- 3) In short, all good things are wild and free (234).

一つ目は、「私は自然を擁護し、絶対的自由と野生のために一言述べてみたい」。二つ目は、「東の地平線のかなたに、美しい風景、充分な野生と自由を見いだせるなどとは、とうてい信じがたい」。そして三つ目は、「すべて善きものとは野生的で自由である」とある。ソーローはこのエッセイの中で“wildness”と“freedom”を並列の関係、ほぼ同意義に使っている。

この作品でソーローは、散歩をするために「自然と野原や森に行く」“we naturally go to the fields and woods”(210) としている。従って、主題である「野生」も本来であれば物質的な自然を表す“wilderness”にするのが当然と思われる。しかし、この作品では「野生」に“freedom”という抽象性が含有されている。だからこそソーローは抽象的な意味が優先する「野生“wildness”を使ったのではないだろうか。『ウォールデン』での“wildness”には未知なる自然や人間に活力を与えてくれる具体的な、また空間的な「野生」はあったが、“freedom”とイコールで結ばれることはない。しかし、「ウォーキング」では「野生」とは「自由」のことであり、「野生」を考えるとということは「自由」を考えるとと言ってもよいだろう。

2. 「ウォーキング」における“freedom”とは

それでは「ウォーキング」における“freedom”とは何なのだろうか。ここで言うソーローの“freedom”とは、私たちが普段考える「自由に何かをする」の自由ではなく、「解放される」“free from~”の自由である。「ウォーキング」における“freedom”は、主に3つに分けられると考えられる。一つ目は旧世界からの自由、二つ目に経済活動からの自由、そして三つ目に法律からの自由だ。

一つ目の自由は旧世界からの思想的な自由である。旧世界とは、かつてアメリカを植民地支配していたイギリスや、白人アメリカ社会の規範の素を作ったヨーロッパのことだ。地理的にも、旧世界であるイギリスやヨーロッパが「東」で新世界であるアメリカが「西」である。

しかし、その「西」もソーローが具体的に目指した空間としての場所ではなく、ソーローが望んだものの象徴として表れる。「ウォーキング」の前半部分では、ソーローの散歩が常に「西」

に向かっている、という話が目立つ。“I find, strange and whimsical as it may seem, that I finally and inevitably settle south-west” (217). とあるように、ソーローが散歩をする方向は南西である。南西に向かう理由は、ある特定の森や湿地、草原または丘に行くためとかかれてはいるものの、その西へのこだわりには、ソーローが当時の西漸運動や領土拡張主義に流されたかもしれないという問題が潜んでいるかもしれない。⁷ 確かにソーローは「ウォーキング」の執筆中にフランス人植物学者ギーヨ (Arnold Henry Guyot, 1807-1884) の影響を受け、歴史的に文明と植物の繁栄は西に移動するというギーヨの思想を日記に書いている。⁸ しかしながら、ソーローは「ウォーキング」で“The West of which I speak is but another name for the Wild” (225). と書き、「西」とは「野生」そのものであると言う。「西」にあるとされるものは一体どのようなものなのかは、その逆の「東」にはないものを説明している箇所から読み取ることができる。“Thither no business leads me. It is hard for me to believe that I shall find fair landscapes or sufficient wildness and freedom behind the eastern horizon. I am not excited by the prospect of a walk thither” (217). ソーローは「東」には十分な「野生」と「自由」がないので、その方向には散歩に行かないと書いている。つまり「西」に向かうことは「野生」そして「自由」を求めることなのだ。ソーローにとって「西」とは「野生」と「自由」の象徴なのである。⁹

また次の引用を見てみると、「西」に行く理由が分かる。

We go eastward to realize history, and study the works of art and literature, retracing the steps of the race; we go westward as into the future, with a spirit of enterprise and adventure. The Atlantic is a Lethean stream, in our passage over which we have had an opportunity to forget the old world and its institutions. If we do not succeed this time, there is perhaps one more chance for the race left before it arrives on the banks of the Styx; and that is in the Lethe of the Pacific, which is three times as wide (218).

大西洋を渡ったのは “to forget the old world and its institutions” とあるように、旧世界とその制度を忘れるためなのだ。さらにソーローは「歩くこと」が「世俗の用事から絶対的に自由である」 “absolutely free from all worldly engagements” (207) と書いている。文明社会に生きる人間は、多かれ少なかれ社会の価値基準や経済システムの中で日常を過ごしている。そのような日常である「世俗の用事」から自由になることは、当時の社会規範や習慣から解放されるということだ。それゆえ、旧世界からの自由とは、19世紀当時の世の中の習慣を作っていたヨーロッパやイギリスの価値観からの「自由」、つまり “free from the old world” と言える。

二つ目は、経済活動からの自由である。

資本主義に生きる人々にとって土地は所有するものという共通の認識がある。しかし、

当時のアメリカにおいて土地はすべて登記されているとは思えない。とはいえ、人々が西洋文明をアメリカの内陸地まで広め、土地に境界線をどんどん敷いていったことは想像できる。地球全体から見れば、土地は特定の生き物の所有物ではない。土地を所有するという人間中心の考えは、土地を経済活動の道具にするヨーロッパ・イギリス的社会規範の外に出ようとするソローの試みとは正反対のものだ。ソローは 1840 年 7 月 3 日の日記にこのように書いている。「価値というのは木や石や詩にあるもので、労働によって左右するものではない。だからきつと最大効果のある土地の権利書というのは地球にはなんの結果も残さないのだ。」¹⁰ またソローは、彼が生まれてから死ぬまでのほとんどを過ごした町コンコードの森林が伐採されるのをいたく悲しんだ。それは彼が副業で（ときおり本業で）収入を得ていた測量の仕事と無縁ではなかっただろう。大好きな野外にいられるという理由でソローはこの仕事に満足していたが、一方、ほとんどの依頼主の目的が木を伐り開くことだったため、ソローは図らずもコンコードの森林破壊に手を貸してしまったことになった。このことがソローの良心をとがめたのである。¹¹

さらに、土地を区切ることに否定的なソローの考えは、作中の「沼地」や「低湿地」に表れている。「ウォーキング」では“meadow”や“swamp”という言葉が頻出し、それぞれ 15 回、11 回登場する。作中にこのような記述がある。“Yes, though you may think me perverse, if it were proposed to me to dwell in the neighborhood of the most beautiful garden that ever human art contrived, or else of a Dismal Swamp, I should certainly decide for the swamp” (228). ソローは、美しい庭付きの家と手つかずの「陰気な沼地」“dismal swamp”のどちらに住みたいかを尋ねられたら、きつと“dismal swamp”だ、と断言する。それほどソローは、明らかに低湿地を好んでいる。ソローの低湿地好きは、おそらくぬかるんだ土地には境界線を表す杭が打てず、目印の石も置くことができないからかもしれない。¹²

また、ソローは「ウォーキング」の別の箇所でも、土地を区切ることを暗に批判した。

Nowadays almost all man's improvements, so called, as the building of houses and the cutting down of the forest, and of all large trees, simply deform the landscape, and make it more and more tame and cheap. A people who would begin by burning the fences and let the forest stand! I saw the fences half consumed, their ends lost in the middle of the prairie, and some worldly miser with a surveyor looking after his bounds, while heaven had taken place around him, and he did not see the angels going to and fro, but was looking for an old post-hole in the midst of paradise. I looked again and saw him standing in the middle of a boggy Stygian fen, surrounded by devils, and he had found his bounds without a doubt, three little stones, where a stake had been driven, and looking nearer, I saw that the Prince of Darkness was his surveyor (212).

人間の進歩と言われる住宅建築や森林伐採は風景を損なうと嘆いているソローが、ある日

測量士と測量を依頼したその土地の所有者と思われる人を見かけたことについての記述である。ソーローは土地の所有者を「どこかの世俗的な守銭奴」“some worldly miser”と呼び、そして測量していた人を「悪魔」“the Prince of Darkness”と表現した。

ここで思い出されるのが、ソーローはこの作品の冒頭で、「歩くということ」を「異教徒から聖地を取り戻す」とことと説明したことだ。“For every walk is a sort of crusade, preached by some Peter the Hermit in us, to go forth and reconquer this holy land from the hands of the Infidels” (206). とあるように、この作品には中世の十字軍のイメージが盛り込まれている。土地を区切る測量士を「悪魔」と喩えることから考えて、「異教徒」“Infidels”とは先ほどの引用の地主と見られる男“some worldly miser”を指していると思われる。ソーローにとって、開発された土地は「人の手に馴らされて、安っぽいもの」“tame and cheap”であるから、その逆と思われる“holy land”とは人間の手が付けられていない土地である。つまりソーローにとって「聖地」とは、「野生」のあるところであると考えられる。従来の「荒れ狂う自然／制御不可能な自然」イコール「悪魔」と考えてきた白人アメリカ人社会の価値観とはまったく逆のことをソーローは主張しているのだ。¹³ 土地の所有という経済活動を否定することは、ソーローにとって「経済活動からの自由」“free from economic activities”なのだ。

三つ目は法律からの自由である。下は「ウォーキング」からの引用で、ここから法についてのソーローの考えを知ることができる。

There is something servile in the habit of seeking after a law which we may obey. We may study the laws of matter at and for our convenience, but a successful life knows no law. It is an unfortunate discovery certainly, that of a law which binds us where we did not know before that we were bound. Live, free, child of the mist, --- and with respect to knowledge we are all children of the mist. The man who takes the liberty to live is superior to all the laws, by virtue of his relation to the lawmaker (240-241).

「幸せな人生というものは法律とは無関係だ」“A successful life knows no law”とある。またソーローは、「勝手に生きる人は、あらゆる法よりも優れている」“The man who takes the liberty to live is superior to all the laws”と言い、「自由」が「法律」に勝つことを宣言している。

その具体的な法律とは 1850 年に施行された「逃亡奴隸法」のことだ。この法律は、当時まだ州ではなかったカリフォルニアが、新たに奴隸制度を禁止する「自由州」“free state”として北側の州に加わった見返りに、南部との政治的バランスをとるために制定された。¹⁴ 奴隸制反対のマサチューセッツ州でさえも同州で逃亡奴隸が捕まったら、その人の「持ち主」のいる州へ引き渡すことが定められた。

ソローは奴隷制に反対していた。¹⁵ それは「ウォーキング」の作品からも分かる。この作品はもともと、日記をライシウムという文化講演会用に書きなおした原稿だった。ソローがコンコードのライシウムで「ウォーキング」のもととなる原稿を“the Wild”というタイトルで講演したのは1851年4月のことだった。その頃、マサチューセッツ州のいたるところで逃亡奴隷法の反対運動が盛り上がっていた。ソローは、その講演を始める際に、社会の期待からして当然奴隷制反対について述べるべきであるのに、「今日は自然について語る」と前置きしている。¹⁶ しかし、ソローは「自然」について語ると言いつつも、「ウォーキング」の作品の影に逃亡奴隷法への遺憾を込めたようだ。彼は「ウォーキング」の終わりから5つ目の段落で逃亡奴隷法について触れている。『ウォールデン』でも登場した「善の意識を目覚めさせる雄鶏」¹⁷を使って、「[雄鶏が]住む所では逃亡奴隷法が通過しない」“Where he [the cock] lives no fugitive slave laws are passed” (246).と表現した。

だが、ソローの遺憾の意は「低湿地」の方により強く表現されているだろう。湿地との関係からソローを研究した常本は、次に挙げるロングフェローの1842年の詩“The Slave in the Dismal Swamp”を引用しながら、19世紀までには「逃亡した奴隷は見つからないように湿地に隠れる」というイメージができあがった、と説明している。¹⁸

“The Salve in the Dismal Swamp”

In dark fens of the Dismal Swamp
The hunted Negro lay;
He saw the fire of the midnight camp,
And heard at times a horse's tramp
And a bloodhound's distant bay.

また、ソローは作品中沼地に入る時の様子を“I enter a swamp as a sacred place” (228).と言う。湿地は、命がけで奴隷制度から逃れようとするアフリカ系アメリカ人の「聖地」だったと言えるだろう。ソローが湿地を好むのは、人権を無視した法律から「自由」になるためだったと思われる。つまり三つ目の自由は“free from laws”なのだ。

3. 「人間の法」より「自然の法」

この論では、ヨーロッパ・イギリス的な社会規範や経済活動、法律を大きくまとめて「人間の法」と位置づける。ソローは「人間の法」では魂の自由は得られない、と考えた。従って、「人間の法」に代わる絶対的な法が必要だ。ソローはそれを「自然の法」に託したと思われる。ソローの作品における「自然の法」は、ソローの思想の本質に触れる大きなテーマであるため、また改めて考えなくてはならないが、ソローにとっての「自然の法」とはモラルや道徳、人間性のことである。

ソローは日記で「自然の法」をこのように定義している。

When dull and sensual I believe these are cornstalks good for cattle no more nor less. The laws of nature are science but in an enlightened moment they are morality and modes of divine life. In a medium intellectual state they are aesthetics (*Journal*, September 28, 1843).

鈍感で俗な気分の際は、ただの科学。心に光がさしたときは道德。知性が中間状態のときは、審美的である。¹⁹ 「ウォーキング」においてソローが伝えたかったのは「人間の法」より、モラルや道德、人間性の象徴である「自然の法」を優先すべきだ、ということだと考えられる。

結び

20 世紀の後半から、環境保護思想の祖としてのソローは“Green Thoreau”「環境保護主義のソロー」²⁰ と呼ばれている。その高まりはネイチャーライティングの盛況ぶりからしても、衰える様子はない。しかし、同時に文学としてのソローの思想もきちんと理解しなくてはならないと筆者は考える。

再び冒頭に挙げた文に注目してみる。「野生の中に世界は保たれる」“in Wildness is the preservation of the World.” この“wildness”とは、本当に環境保護で使われている「原生自然」という意味のみを含有しているのだろうか。

確かに、「ウォーキング」には現代の生態学を思わせる文章も少なからずある。例えば「野生動物を保護することは、一般的にそれらの生息領域や休息する森を作ることだ」“To preserve wild animals implies generally the creation of a forest for them to dwell in or resort to” (229). という文である。しかし、この一節のすぐ後には「それは人間にとっても同様だ」“So it is with man.”と続くのだ。「保護する」“preserve”という言葉は環境保護のイメージが強い言葉だが、ソローが「保護する」という言葉を使うとき、ほぼ必ずと言ってよいほど原生自然という物質的なものの保護と、何か精神的なものの保護の二つの意味が込められている。その精神的なものとは作品によって少しずつ異なるが、“preserve”に二重の意味がある点は、彼の代表作『ウォールデン』でも変わらない。²¹

一般的にソローの作品の“wildness”を訳す場合は原生自然の意味が優先される「野生」が使われる。しかし、今回見てきたように、「ウォーキング」という作品において“wildness”とは“freedom”のことであり、この“freedom”とは、ヨーロッパ的な社会規範も経済も法律も含んだものからの「自由」をも含めたものである。このことを考慮すると、“wildness”を具体的な意味が優先する「野生」ではなく、抽象的な意味が優先する「野性」と訳したくなる。

ソローの作品が秀逸なのは、実際に歩いた野原や森という“wildness”を書きつつも、人間の理想の状態である「自由」の意味を含有した“wildness”を同時に表現しているところだ。ソローが求めたのは、人間の外界を支配する旧世界や経済、法律から解放され、人間の内なる精神である「自由」を大切にすることである。彼はその精神が「自由」である状態を“wildness”と表現した。“Wildness”を森などの原生自然と解釈するのみではなく、同時に人間の理想的な状態は「自由」であるというソローの思想をも読み取って、初めてソローの本質を理解できるのではないだろうか。

< 註 >

本稿における“Walking”からの引用は、すべて“Walking,” *Excursions and Poems*. Boston: Houghton Mifflin, 1906. を使用しており、本文中には頁数のみを記すこととする。また、引用中の下線部は筆者による。

1 岡島成行『アメリカの環境保護活動』岩波書店、1990年、(50)

2 社団法人日本環境教育フォーラム・トヨタ自動車株式会社、エコのもりセミナー事務局「エコのもりシンポジウム 2005 持続可能な社会は『森の生活』からー「観察」と「実践」ソローのメッセージー」池袋アムラックスホール、2005年2月17日

3 Leopold, Aldo. *A Sand Country ALMANAC*, New York: Oxford University Press, 1949. 日本語版の出版では新島義昭訳『野性のうたが聞こえる』森林書房、1986年。『野生のうたが聞こえる』講談社、1997年。

4 Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge: Harvard University Press, 1995. 485

5 現在は新しいスローガン“Explore, enjoy and protect the planet.”に変更されている。
<http://www.sierraclub.org/>

6 Walls, Laura Dassow. “Believing in Nature, Wilderness and Wildness in Thoreauvian Science.” *Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000. 15.

7 ソローが西漸運動の思想に流されたという問題性は、『ウォーキング』の訳者大西直樹の指摘がある。(ヘンリー・D・ソロー『ウォーキング』春風社、2005、98-101) ソローが「ウォーキング」のもととなる日記を書いていたのは1849年から1852年である。その頃の日記で「西」について触れている箇所には、本文中のギョーヨやフランス人植物学者ミシヨ(Michaux)の *The North American Sylva* からの引用と共に、イギリスよりもアメリカの自然の方が豊かで植物自体も大きいという内容や、自然と人間との関わりが大切である、という政治的意味のない普通の自然の大切さが書かれている。「西」についてその他の場合、「夕日が綺麗だ」などの自然の美しさを書き綴った箇所が多い。ソローが「ウォーキング」の原稿を最後に加筆編集したのは1862年の早春のことだ。かつて『ウォールデン』を出版した Ticknor & Fields 社のフィールズ氏が *Atlantic Monthly* を1859年に買収し、1861年には編集権を得た。彼はソローに原稿を依頼した。病気ではあったが、ソローは意欲的に原稿を書いた。1862年3月11日に「ウォーキング」をフィールズ氏に渡すと、すぐに受け入れられ、ソローの死 1862年5月の翌月の *Atlantic Monthly* 6月号に掲載された。(Harding, 458)「ウォーキング」を書いていたときのソローの心境を、日記から読み取りたいところだが、病気のため彼の日記は1861年11月3日が最後となってしまう、そ

れは難しい。(Henry David Thoreau, *The Journal of Henry David Thoreau*, vol.14, Layton: Gibbs M. Smith, 1984. 346. Originally published: Journal. Boston: Houghton Mifflin, 1906) ソローの意識がなぜ「西」に向かったのか、または本当はどこへ向かっていったのかを考えるのは、これからの課題であると考える。

⁸ Thoreau, Henry David. *Journal*, Vol. 3. Princeton: Princeton University Press, 1990, 182-3.

⁹ Schneider, Richard J. "'Climate Does Thus React on Man': Wildness and Geographic Determinism in Thoreau's "Walking."" *Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000. 59-60.

¹⁰ Thoreau, Henry David, *Journal*. Vol. 1. Princeton: Princeton University Press, 1981.147. "Some symbol of value may shape itself to the senses in wood, or marble, or verse, but this is fluctuating as the laborer's hire, which may or may not be withheld. Perhaps the hugest and most effective deed may have no sensible result at all on earth, but paint itself in the heavens in new stars and constellations."

¹¹ Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau*. Princeton: Princeton University Press, 1992. 186

¹² 伊藤詔子「地図と反地図---測量士ソローと沼地のポリティックス」『Henry David Thoreau: *Walden* 新たな夜明け』日本ソロー学会、2004. 93

¹³ キャロリン・マーチャント『自然の死』団まりな、垂水雄二、樋口祐子訳、工作舎、1985. 244

¹⁴ "The Compromise of 1850"と呼ばれている。Ciment, James. *The Young People's History of the United States*. New York: Burns & Noble, 1998. 77

¹⁵ Harding, 314.

¹⁶ Harding, 315. 講演前のソローのスピーチは次のようだった。"I feel that I owe my audience an apology for speaking to them tonight on any other subject than the Fugitive Slave Law on which every man is bound to express a distinct opinion, ... but I had prepared myself to speak a word now for Nature ... for absolute freedom & wildness, as contrasted with a freedom and culture simply civil ... to regard man as an inhabitant, or a part and parcel of nature ... rather than a member of society."

¹⁷ Thoreau, *Walden*. "Sounds," 127.

¹⁸ 常本浩「ソローとディズマル・スワンプ」『Henry David Thoreau: *Walden* 新たな夜明け』日本ソロー学会、2004,123-4

¹⁹ Thoreau, *Journal*. Vol. 1, 468

²⁰ Buell, Lawrence, Foreword to *Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000. ix

²¹ Thoreau, *Walden*. 313. "Spring"の章から。"preserve the equilibrium of Nature" (自然の均衡を保つ) という言葉には、「春」という現象が宇宙から地上のカエルまで、大きな世界のバランスを保つことの象徴の意味が含まれているように感じる。逆に、同頁には "After the germs of virtue have thus been prevented many times from developing themselves, then the beneficent breath of evening does not suffice preserve them." とあり、ソローは"virtue"「良心」を"preserve"するものと捉えていることが分かる。

< Bibliography >

Berger, Michael Benjamin. *Thoreau's Late Career and "The Dispersion of Seeds": The Saunterer's Synoptic Vision*. New York: Camden House, 2000.

Buell, Lawrence, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge: Harvard University Press, 1995

- , in *Foreword to Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000.
- Foster, David. R. *Thoreau's Country: Journey Through a Transformed Landscape*. Cambridge: Harvard University Press, 1999
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. Princeton: Princeton University Press, 1992
- Hoag, Roland Wesley. "Thoreau's Later Natural History Writings." *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*. New York: Cambridge University Press, 1995.
- Longfellow, Henry, W. *The Poetical Works of Henry W. Longfellow*. London: Suttaby & Co. [n.d.] 43.
- Schneider, Richard J. "Climate Does Thus React on Man": Wildness and Geographic Determinism in Thoreau's "Walking." *Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000.
- Thoreau, Henry David. *The Journal of Henry David Thoreau*. Salt Lake City: Peregrine Smith Books, 1984.
- , *The Writings of Henry David Thoreau: Journal* vol. 1-6, Princeton: Princeton University Press, 1981-2000
- , *The Writings of Henry David Thoreau: Journal* vol.8, Princeton: Princeton University Press, 2002.
- , *The Writings of Henry David Thoreau: Walden*. Princeton: Princeton University Press, 2004
- , "Walking." *The Writings of Henry David Thoreau. V. Excursions and poems*. Ed. Bradford Torrey. Boston: Houghton Mifflin, 1906.
- Wallace, Anne D. *Walking, Literature, and English Culture: The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century*. Oxford: Clarendon Press, 1993
- Walls, Laura Dassow. *Seeing New Worlds: Henry David Thoreau and Nineteenth-Century Natural Science*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1995.
- , "Believing in Nature, Wilderness and Wildness in Thoreauvian Science." *Thoreau's Sense of Place*. Ed. Richard J. Schneider. Iowa City: University of Iowa Press, 2000
- 伊藤詔子「地図と反地図---測量士ソローと沼地のポリティックス」『Henry David Thoreau: *Walden* 新たな夜明け』日本ソロー学会、2004.
- ウォースター、ドナルド『ネイチャーズ・エコノミー、エコロジー思想史』中山茂訳、リポート、1989
- 小野和人『ソローとライシアーアムアメリカ・ルネサンス期の講演文化』開文社叢書、2000
- キャロリン・マーチャント『自然の死』団まりな、垂水雄二、樋口祐子訳、工作舎、1985.
- ソロー、ヘンリー・D、『ウォーキング』大西直樹・訳、春風社、2005
- 常本浩「ソローとディズマル・スワンプ」『Henry David Thoreau: *Walden* 新たな夜明け』日本ソロー学会、2004.